4 自発・受身・可能・尊敬の助動詞

る らる

接続・「る」……四段・ナ変・ラ変動詞の未然形に付く。
「らる」…四段・ナ変・ラ変以外の動詞の未然形に付く。

活用・

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型
る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ	下二段型
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ	

意味・**1 自発**［自然ニ…レテクル］
①今日は都のみぞ思ひやらるる。（土佐日記）
②さやうの所にてこそ、万に心づかひせらるれ。（徒然草）

2 受身［…レル・…ラレル］
③親・同胞の中にても、想はるる想はれぬがあるぞ、いとわびしきや。（枕草子）
④思ふ人の人にほめらるるは、いみじううれしき。（枕草子）

3 可能［…レル・…コトガデキル］
⑤涙のこぼるるに目も見えず、ものも言はれず。（伊勢物語）
⑥庵なども浮きぬばかりに雨降りなどすれば、恐ろしくていも寝られず。（更級日記）

4 尊敬［オ…ニナル・…ナサル］
⑦さらば疾う帰られよ。（平家物語）
⑧大井の土民に仰せて、水車を造らせられけり。（徒然草）

語義要説 る・らる
主体の意志に関係なく、ひとりでにある動作や状態に至っていることを表す**自発**が基本義。自発の影響が主体に及ぶ意から**受身**、自然にものごとがそうなる、実現する意から**可能**、高貴な方の動作や状態を表す時に、それが自然に成立したものとして婉曲に表現するところから**尊敬**の各用法が派生した。

◆自発と可能には命令形がない。

①今日は都のことばかりが思いやられることだ。
②そのような所（＝旅先）でこそ、何事にも自然と気遣いされてくる（するようになる）ものであるよ。
③親や兄弟の中においても、愛される者、愛されない者がいるのは、とてもやるせないことであるよ。
④（自分の）思いを寄せている人が他の人から褒められるのは、とてもうれしいものですよ。
⑤涙がこぼれるので目も見えず、ものも言うことができない。
⑥仮小屋も浮き上がらんばかりに雨が激しく降るので、恐ろしくて眠ることもできない。
⑦それならば、早くお帰りなさい。
⑧大井の土地の住民にお命じになって、水車をお造らせになった。

ここに注目

「る」「らる」の意味の識別

(1) **自発** ➡ **思考や感情に関する語に付く。**（例）思はる・しのばる・眺めらる・驚かるなど
(2) **受身** ➡ **主語にはたらきかけたり、影響を与えたりする人や物**（「～に」「～には」など）を伴う。（「～に」「～には」は省略されることもある。）
（例）思ふ人の人にほめらるるは、いみじううれしき。（④）
※受身の場合、**主語は人間や生物**になる。ただし、**例外的に無生物が主語**になることもある。
（例）かは竹の風に吹かれたる、［川竹が風に吹かれているのを］（枕草子）
(3) **可能** ➡ 下に**打消・反語表現**を伴う。（鎌倉時代以降は、単独で可能を表すこともある。）
(4) **尊敬** ➡ **尊敬動詞**に付く。（例）思さる・思し召さる・仰さるなど
※後に尊敬の補助動詞「たまふ」を伴った「れたまふ」「られたまふ」の形では、「る」「らる」は受身か自発である。

練習問題

1 （　）内の助動詞「る」「らる」を適切な形に活用させなさい。
(1) 名を聞くより、やがて面影は推しはから（る）心地するを、（徒然草）
(2) 鉢に植ゑ（らる）ける木ども、皆掘り捨て（らる）にけり。（徒然草）
(3) なべてならぬ法ども行は（る）ど、さらさらその験なし。（方丈記）

2 次の――部の助動詞の意味を答えなさい。
(1) かの例思ひ出でられ侍りしに、（徒然草）
(2) 木曾殿の最後のいくさに、女を具せられたりけりなんど言はれんことも、しかるべからず。（平家物語）
(3) 鼻にほめらるる婿。（枕草子）
(4) 男はた、寝られざりければ、（伊勢物語）
(5) 後徳大寺大臣の、寝殿に、鳶ゐさせじとて縄を張られたりけるを、（徒然草）

1 格助詞

格助詞は、体言や体言に準ずる語（活用語の連体形など）に付いて文節を作り、その文節が文の成分としてどのような役割を果たすのかを示す。主な用法として、主格、連体修飾格、連用修飾格、同格などがある。

助詞	意味・用法	接続
の が	1 連体修飾格［…ノ］	体言 連体形
	2 主格［…ガ］	
	3 同格［…デ・デアッテ］	
	4 体言の代用〔準体法〕［…ノモノ］	
	5 類似・比喩［…ノヨウナ］	

1 ①それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられむとしけり。（竹取物語）
②おのが身は、この国の人にもあらず。月の都の人なり。（竹取物語）

2 ③雀の子を犬君が逃しつる。（源氏物語）
④この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば、いかがは悲しき。（土佐日記）

3 ⑤いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。（源氏物語）
⑥夢にいと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、（更級日記）

意味・用法の補説 ◆ が・の

1 「体言＋が・の＋体言」の形が多い。
3 「が・の」の上と下が同じ事物を表す。
4 直後に体言が省略されている。

◆「が・の」はもともと共に主格を表したが、次第に「が」が主格、「の」が連体修飾格に分化していった。

◆主格「が・の」を受ける述部が連体形になることがある。会話や和歌で多く見られ、余情を表す。

①それ（＝竜）の玉を取ろうと思って、多くの人々が殺されようとした。
②私の身は、この国の人でもありません。月の都の人です。
③雀の子を犬君（＝召使いの名前）が逃がしてしまった。
④この家で生まれた女の子がいっしょに帰らないので、どんなにか悲しいことか。
⑤それほど高貴な家柄ではない方で、とりわけ（帝の）御寵愛を受けていらっしゃる方があった。
⑥夢に大層こざっぱりと美しい僧で、黄色い地の袈裟を着た僧が現れて、
⑦この歌は、ある人が言うことには、柿本人麻呂のものである。
⑧この国の博士たちの書いた物も、昔のものは感銘深いことが多いものだ。
⑨たとえて言えば、旅人が（最後の）一晩の宿をもうけ、年老いた蚕がまゆをつくるようなものである。
⑩まことに消えてゆく露のような感じがして、

4 ⑦この歌、ある人のいはく、柿本人麿がなり。（古今集）
⑧此の国の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれなること多かり。（徒然草）

5 ⑨いはば旅人の一夜の宿を作り、老いたる蚕の繭を営むがごとし。（方丈記）
⑩まことに消えゆく露の心地して、（源氏物語）

ここに注目

同格「が・の」の訳し方

・同格を訳すときは省略された体言を補って訳す。

……体言＋の＋連体形（体言）……体言で体言～
（同格　省略　補う）

例 いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが（⑥）
［大層こざっぱりと美しい僧で、黄色い地の袈裟を着た僧が］

・直前の体言も省略されている場合は、文脈から補う。

例 いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふ（⑤）
［それほど高貴な家柄ではない方で、とりわけ（帝の）御寵愛を受けていらっしゃる方］

◆「…が・の＋形容詞の語幹＋さ」
多く和歌で見られ、感動を表す用法

例 秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の目にはみえずて音のさやけさ（古今集）
［秋萩を足にからみつかせて押し倒しながら鳴く鹿の、姿は見えないが、なんと澄みきった声だろう。］